

I 次の設問に答えよ。

問一 文中の傍線部と同一の漢字を使うものを、それぞれの中から一つ選んでマークせよ。

- ① 「何やってんだ!」と彼はジチョウウ気味に呟いた。
- 1 あの人は有名な芸術家だが、出目が明らかではない。 2 この観音様のお顔は、何ともジ悲深いものだ。
3 ジ令が出て、春から転勤になった。 4 日も暮れてきたので、家ジを急いだ方が良い。
5 和食にはジ味に留む料理が多い。
- ② 肉と野菜を中心にコンダテを考える。
- 1 コン迷を極めた世界情勢に人々の不安が募っている。 2 夏の空にはコン碧の青が広がっていた。
3 久しぶりの友人との再会にコンを交えた。 4 引越しのためのコン包資材を注文した。
- ③ 感情をセイヨすることは難しいが、それができるとこそ大人の証とも言える。
- 1 新しいセイ度で導入され、市民生活に大きな変化をもたらした。
2 彼のセイ実な人柄は、多くの人から信頼を得ている。
3 この部屋は常にセイ潔に保たれており、とても快適だ。
4 その時計はセイ巧にできており、職人の技が光る逸品だ。
5 ワインは長い年月を経て、美しい色と香りを放つセイ熟の時を迎えた。

- ④ 法令・規則をタンリヨクテキに運用する。
- 1 あの店はみたらタン子子が有名です。 2 記憶のタン片をつなぎ合わせる。
3 たとえ家族であっても、不正はタン勅する。 4 タン尊女卑の思想は古臭い。
5 その実験はタン階を経て実施しなければならぬ。
- ⑤ この度のことは、何卒コカンジョ願います。
- 1 ある原子が別の原子に置カンされて、新しい物質が生まれる。 2 この町には主要なカン線道路が通っていない。
3 上司は部下に対してカン大な態度をとるべきだ。 4 この花は、カン賞用の植物として人気だ。
5 予備費をカン定に入れる。

問二 文中の傍線部の漢字の読み方をひらがなで書け(送り仮名を記してはならない)。

- ① その容疑者は甘言を弄して人を欺くことに長けており、周囲から警戒されていた。
② その看護師は病気の友人を懇ろに看病し、その回復を心から願っていた。
③ 友人は私の突然の質問に怪訝な顔をしたが、すぐに笑顔で答えてくれた。
④ 彼の功績を矮小化せんとする論調は、公正な評価を損なうものである。
⑤ 古傷が雨のたびに疼くように、記憶が胸の奥で蘇る。

います。「狂気の歴史」と「臨床医学の誕生」に共通するのは、人々の認識や経験のあり方を総体的に規定する「知の枠組み」が、個々人に先立って存在する構造のようなものとしてあるという見立てです。可能な限りの関連資料を集め、分析していくことを通してこのような知の枠組みを掘り起こす試みをフーコーは「考古学」と表現しました（遺跡などの発掘に携わる「考古学」とはもちろん違います。この立場からすると、心理学等の「人間」を扱う諸学問は、こうした知の枠組みがあつてこそ、もしくはそれが歴史的に変容することで初めて、社会に現れ出ることができたのだということになります。）⁽²⁾

なぜこのようなひねくれた見方もいえる二冊を書いたのでしょうか。これは、当時のフランスの思想状況に関係しているといわれています。このあたりを詳しく書くことも長くになるので、興味のある方はフーコーの著作や各種解説書をご覧いただきたいのですが、「人間」というの可能性を至上のものとして考えるような（一般的にも影響力があつた）当時の思想状況に対して、「人間」の認識や経験のあり方は各時代における知の枠組みによって規定されており、それは時代を追つて順に進歩・発展していったかのような単純な話でもないのだ、という批判を提出しようとしたのだといえます。この批判的見方を、より包括的に展開したのが次著『言葉と物——人文科学の考古学』（一九六六—一九七四）です。『言葉と物』は本当に難しい本なのですが、要点をかいつまむと、今述べた「人間」の可能性を至上のものとするような知の枠組みは、世界のあらゆるものを「類似」のまなざしから関係づける一六世紀まで、すべてを「表象」のもとに秩序づける古典主義時代（二七—一八世紀）という変転を④）六末に、一八世紀末に「人間」を歴史のなかに位置づけられた有限なものとなす知の枠組みが現れ出てきたこと由来していることを明らかにした本だとひとまずいえるでしょう。つまり、二〇世紀の思想状況はそうした知の枠組みによって規定されているにすぎず、それはやがて消え去っていくことになるだろうとして、**B** な「人間」の捉え方が絶対的・本質的なものではないことを暴き出したのです。⁽³⁾

一九六〇年代のフーコーの関心はこのように「知」のあり方にあるといえるのですが、これまでの著作についての理論・方法論的な整合性をより**C** なかたちで与えようとした次著『知の考古学』（一九六九—二〇二二）が、「知」をめぐる各学問分野での研究に非常に大きな影響をもたらしたといえます。その影響は、ひとことであろうと「言説」の分析というアプローチの提案にあります。ごく簡潔にいうならば言説分析というのは、「語られたこと」そのものの水準に注目しようということです。これも当時のフランスの思想状況および思想史・歴史学に対する批判が意図されているもので、「語られたこと」の背後にそれを司る何かを読み込みもつとする。それによって「語られたこと」をその外部から説明しようとするのではなく、「語られたこと」それ自体にある種の自律性・秩序・規則・重みがあるをみなし、「語られたこと」の水準に留まってそれらを考え抜いていくとするのが「言説分析」というアプローチだといえます。『言葉と物』までで検討されていた「知の枠組み」は、「知の考古学」においてはこのような、より動態的で関係論的な「語られたこと」の秩序・規則におおむね置き換えられたといえると思います。⁽⁴⁾

といったもなかなか分かりづらいかと思うので、その要点について、筆者が以前分析したところのある「少年犯罪の語られ方」を例にしながらできる限りかみ砕いてみようと思います。フーコーは、あることがらに関する「一つの意味ある語りを『言説』と表現しましたが、それらを眺めていくと、色々な語りがありえるはずなのにかなり限られた語りばかりが偏つて観察でき、誰もが似たようなことを言うようにみえることがそれなりにあります。「言説」とは、そうした偏りや、それぞれの語りの相互の位置関係（散らばり・結びつき）を内包した、あることをめぐる語りの総体を指すものだと考えてもらうのがいいでしょう。

⑤ これに関して、あるとき観察されていた偏つた語りが見つかるまにか姿を消し、別のある種の語りばかりが、他を⑤）ような勢力をもつほどに多くみられるようになることもあります。ここで少年犯罪を例にすると、戦後から一九六〇年代頃までは「社会の歪み」や「差別」が少年を非行に走らせているのだと新聞や雑誌で「様に語られていたのが、七〇年代以降になるとこうした語りがはばみられなくなって「学校」や「家庭」での**i** が原因だと専ら語られるようになり、九〇年代後半から今日に至るまでは少年の異常な内面⑥）「心の闇」が原因だと多く語られるようになる、といった偏つた語りの傾向がそれぞれ観察される、というようなことです（牧野二〇〇六、二〇二五）。

⑥ このようにして、あることがらをめぐる語りの総体⑦）「言説」における偏り・散らばり・結びつきのあり方が変わっていくと、そのことがらをめぐるイメージや人々の向き合い方もまた変わっていくこととなります。少年犯罪についても、その語りの

D なあり方が変わっていったことで、一般的なイメージや対策のあり方にも変化が生じていったといえます。では、こうした語りの変化はなぜ、どのようにして起こったと考えるべきでしょうか。(6)

それを特定の誰かや集団、出来事だったり、当時の社会的背景や「ii」から説明するスタンスもありえます。しかし、あることがらについて言い表されたことの一つ一つ(言表)のあり方、言い表されたことの総体(言説)を眺めていくと、どうもそこには独特の秩序——「生懸系」や「臨場」といったイメージで捉えてもらおうと分りかややくなるかも知れませんが、誰かの意図通りにそれが形成されたといえるほど秩序は単純ではなく、何らかの社会的背景などによってもそうした秩序の詳細を説明しきれそうにない、つまり「語られたこと」そのものではない、「非言説」的・要因に事態を単純に還元できない、ということとは多く例が挙げられるように思われます。

再び少年犯罪を例にする、二〇〇〇年代にある少年事件が起きた際、その直後に刊行された週刊誌の記事に「加害少年の心の闇は深い」というような文句が掲載されていました。このような事例は当時の他の事件においても、各新聞・雑誌でしばしばみられるものでした。事件の取材がまだ十分に行われていないにもかかわらず、「心の闇」の問題として事件を語るように、他のようにも事件を語ることができるかも知れないのに、そう語らずにはいられない、独特な語りの秩序のようなものが先立って存在することをここから推察することができます。逆に、一九九〇年代中頃よりも前に、加害少年の内面が原因があるとしてそれを掘り下げようとする報道はまったくないわけではないものの、優勢な語りというほどには多くみられません。端的な例を挙げると、一九五〇年代に一家七人を殺害したという少年事件が起きているのですが、この事件における加害少年の内面が掘り下げられることはなく「精神病者の発作的なものではないか」とされて、報道は一回きりで終わっていました。今日同様の事件が起きたら、その内面(心の闇)が微細に、執拗に掘り下げて報じられ、何らかの対策が検討されるようになるはずですが、しかし当時の逆に、少年事件を専ら「社会の歪み」や「差別」などに結びつけて(結びつけられる限りで)盛んに語ろうとする、そう語らずにはいられない「X」をみてとることができるとは思いません。

こうした語り方の変化を、たとえば当時の社会的背景や、社会の心理主義化といった観点から説明できる部分もあるとは思いますが、加害少年・家庭・学校などをそれぞれどのような視点からどう語り、動機をどう解釈するのといった細かい語り口までもが各事件の報道において似通っていることを説明するには、大きな観点を持ち出すだけで十分とはいえません。こうした語り口は、それ以前の少年事件(やそれ以外の出来事)をめぐって語られたことが再利用されたり転用されたりしながら積み重なるなかで、それ独自の秩序を形づくっていった側面が大きいように思われるのです。(牧野二〇二五)。

フーコーは「語られたこと」という独自の水準は、私たちの実体験における各種の出来事が一つ一つ固有の重みをもっているのと同様に、固有の出来事ないしは事実としての重みをもっているとして「言説的出来事」「言説的事実」という言葉を使っているように、言説分析の説明は「筋縄ではないかと思いますが、このように「語られたこと」を他に還元しようとするのではなく、それ固有の秩序と出来事に注目し、積み重ねられた「言説的出来事」の分析を通して「語られたこと」の秩序、つまりその偏り、散らばりや結びつきを明らかにしていこうとするのが言説分析だとひとまず考えてよいと筆者は思っています。

あることがらをめぐって「語られたこと」の総体は、その社会における人々の想像や表現の範囲がどこまで、またどのように広がっていたのかを示しているといえます。だとすると、同時代的な「語られたこと」の秩序の外に出て私たちはものごとを認識・経験することができないということになるので、この言説分析というアプローチは、その秩序を分析することで私たちがある対象について認識・経験するあり方を浮き彫りにして、私たちの成り立ちを明らかにしようとするものだともいえます。

この観点からすると「自己」のあり方は、特定のあり方が多く語られて一定の勢いをもち、それがいつしか語られなくなってしまう、それと対峙した秩序の変容のなかで優勢となる「iii」や人々の向き合い方が変わっていくように、言説のものでその可能性が繰取られ意味づけられるものとして捉えられることにあります。つまりそれぞれの社会における「自己」の可能性もあり方、および優勢なあり方は、言説の効果として生まれるということになります。

このことに関連していえば、ある言説において中心的とみなせそうな人物がいたとしても、それをその個人の独創性として考えるのではなく、そのような人物が独創的とみなされ、中心的な位置取り(主体位置)をとることができると言えるような言説の秩序のあり方について考えようとするのが言説分析の「iv」だといえるかなと思います。

後述するように、筆者はこのような観点から現代日本における「自己」のあり方に照準を合わせて言説の分析を行ったわけですが、このアプローチではもう少しく広く、「自己」の構成にかかわるさまざまなことから分析していくこともできます。たとえば前節で紹介した各種の感情もそうですし、「自己」に内在的に備わると一般的なみにみられている各種の性質や能力、各種の「人間」をめぐるカテゴリーなども分析の対象になる、というより実際にそうした分析が行われてきました。具体的な分析対象はさまざまですが、このアプローチを通じて、私たちの現在のあり方がいかに縁取られ意味づけられているのかを考えていくことができるのです。

言説の分析をめぐっては、世界的に、学問領域をまたいでさまざまな応用的研究がなされ、またその方法をめぐって論争もさまざまになされています（日本では佐藤・友枝二〇〇六を参照。何をどこまで調べていくべきなのか、「言説」と「非言説」の関係結局どう考えればよいか、言説の「外」に出て認識・経験することができない私たちがどのように同時代的な言説を対象化して結ぶことができるのか、**Y**、等々。これらのうち、フーコーをよく読んでいけばある程度解決できるものものがある。ですが、読んでも解決しきれず実際に資料を分析しながらその都度落としどころをみつめていくしかないようなものもあります。

言説分析については、フーコー自身が本書で紹介したこと以外にもさまざまなことを論じており、また今日における多様な応用的研究があるなかで、これが正しい言説分析だという合意はおそらく形成できないのだからと思われれます。ただ、「語られたこと」という固有の水準にまずもって注目するという一点については共有されているはず（そうであってほしい）です。そこから何かがいえるまでに言説の分析を実行するのはなかなか簡単なことではないと個人的な経験からは思うのですが、それでも、私たち、あるいはかつての人々が知らず知らずのうちに収まっている認識・経験の秩序を辨別し、自らがどのように構成されているのかを明らかにしていくことは、他のアプローチにはない魅力と面白さがあると思つています（牧野二〇一九も参照）。

一九七〇年代に入るとフーコーは「権力」の問題に強い関心を抱くようになり、それはいつまでも、フーコーが考えようとした「権力」は、その言葉から一般的に考えられるような「権力者」が占有し、上から振る、自らの意志を押しつけて人々を抑圧するものではない、むしろ、上からというよりは下から、つまり私たち一人一人が日常生活を送るさまざまな場

面において、誰かがそれを司っているということもなくいつのまにか行使され、その微細な動きの効果として私たちが特定のあり方で意識し、考え、感じ、ふるまい、語る存在として、つまりある種の「主体」として生み出すような権力だといえます。

アプローチとしても、この時期のフーコーは新たに「系譜学」を提唱するようになっていきます。この系譜学においても、相対的に自律した固有の秩序と出来事性を有している言説への注目は保持されているものの、より包括的に、建築物のようなモノ、教育・訓練・矯正などに関する各種の規則や技法、法律などさまざまなことが分析の対象に含まれるようになります。フーコーは、実際に行使されるなかで特定の「主体」を構成するものとしての権力を分析するにあたっては、今述べたような各種のこととがそれぞれのように人々に働きかけているのかというその技術ないしは技術論（テクノロジー）と、それらが相互に織りなす**Z**（ネットワークないしはエコノミー）の成り立ちに注目する必要があると考えていました。そういうわけで、系譜学というのは私たちが特定のかたちで「主体化」するよう働きかけてくるテクノロジーやそれをめぐる関係性が、歴史的な**V**のなかでいかにして形成されたのかを明らかにしていくことで、現在の私たちのあり方を逆照射するアプローチだといえます。

その成果が「監獄の誕生——監視と処罰」（一九七五―一九七七）だといえます。この本では、主体化にかかわるテクノロジーのあり方がまさに考察されており、それを**E**に図解するものとして「パノプティコン（『望監視装置』）」という建築モデルが紹介されています。

牧野智和著「社会は「私」をどうかたちづくるのか」ちくまプリマー新書 から

問一 次の文は（1）～（6）のどの段落の最後に続いているものか、最も適当だと思うところを選んでマークせよ。

フーコーは言説を説明するにあたって、それを「空間」のようなものとして表現するところがあるのですが、そのような空間的イメージで捉えてもらうと分かりやすくなるかもしれません。

問二 空欄 ①④⑤ には、次のどの動詞の活用形を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ（同じ動詞を二度用いてはならない）。

- 1 及ぼす
- 2 抱える
- 3 たどる
- 4 排除する
- 5 読み解く

問三 空欄 i s v には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ（同じ言葉を二度用いてはならない）。

- 1 イデオロギー
- 2 イメージ
- 3 スタンス
- 4 ストレス
- 5 プロセス

問四 傍線 W 「ひねくれた見方」の説明として最も適当なものはどれか、一つ選んでマークせよ。

1 「狂気」の本質や内実を直接的に考えようとしたり、「狂気をめぐる経験」を歴史的に変化する中で捉えようとする見方

2 医学に対して表面的に身体を観察するのではなく、身体の深層に埋もれた「不可視なもの」を暴き出そうとする見方

3 人々の認識や経験のあり方を体系的に規定する「知の枠組み」を個人的な思想のもとに読み解く見方

4 「人間」の可能性を至上のものとする考え方を社会や時代との関わりの中で、相対的かつ静態的に見直す見方

5 世界のあらゆるものを「類似」のままざして関係づけ、「表象」のもとに秩序づける古典的な見方

問五 空欄 A E には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ（同じ言葉を二度用いてはならない）。

- 1 総体的
- 2 端的
- 3 同時代的
- 4 発展的
- 5 理性的

問六 空欄 X には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、一つ選んでマークせよ。

- 1 語りの秩序
- 2 言説分析の限界
- 3 社会の歪みや差別
- 4 少年の心の動機
- 5 人間の認識や経験

問七 空欄 Y には、次のどの応用的研究の論争の例を入れるのが最も適当か、一つ選んでマークせよ。

1 言説分析は、「語られなかったこと」の秩序で人間の認識・経験を明らかにすることができるのか

2 社会における「自己」の可能なあり方、および優勢なあり方は、言説の効果として生まれるのかどうか

3 そもそもフーコーが述べるような言説分析を実際に行うことは可能なのか

4 応用的研究においては、これが正しい言説分析だという合意を形成できるのかどうか

5 知らず知らずのうちに人々が持つ認識や経験の秩序を明らかにしていくことは言説分析以外のアプローチにも可能か

問八 空欄 Z には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、一つ選んでマークせよ。

1 異種格闘的な関係性

2 異種混交的な関係性

3 異種排他的な関係性

4 同種自律的な関係性

5 同種相対的な関係性

6 同種融合的な関係性